労働政策研究報告書　No. 114
サマリー　2010
JILPT：The Japan Institute for Labour Policy and Training

# 成人キャリア発達に関する調査研究
## ―50代就業者が振り返るキャリア形成―

労働政策研究・研修機構

**執　筆　担　当　者　（執筆順）**

| 氏　　名 | 所　　属 | 執筆担当章 |
|---|---|---|
| 西村　公子 | 労働政策研究・研修機構　統括研究員 | 第１章１～２、第７章 |
| 下村　英雄 | 労働政策研究・研修機構　副主任研究員 | 第１章３～４、第４章、第５章、第６章 |
| 深町　珠由 | 労働政策研究・研修機構　研究員 | 第２章 |
| 室山　晴美 | 労働政策研究・研修機構　主任研究員 | 第３章 |


**概要**

本研究では、50 代就業者が 20 代から 50 代に至る自らのキャリアを振り返った際の外的・客観的キャリア、内的・主観的なキャリアに焦点を当てて調査を行い、成人キャリア発達の内容とそのキャリア形成支援上の課題を検討した。調査では、通常のアンケートによる量的なデータの他に、ライフライン法、自由記述などの手法を用いて質的なデータを収集し、分析を行った。調査結果をもとに、成人キャリアの多様性や質的アセスメントの可能性等を示し、今後の成人キャリア支援施策及びキャリア・コンサルティング技法等に関する示唆を行った。

## 1. 本研究の目的

人口減少下において、働く意欲と能力をもつ全ての人々が生涯を通じてその能力を蓄積・発揮することが、活力ある豊かな経済社会の実現のための重要な課題となっている。

いったん労働市場に参入した後の成人層に対するキャリアガイダンスをはじめとするキャリア形成支援に関する議論は、従来、労働市場への参入・再参入層あるいは定年前後の高齢層に対するものに比べて少なかった。

しかしながら、雇用をめぐる環境条件は大きく変化している。雇用の安定に対する企業の考え方をみると、企業における「長期安定雇用」維持の態度の高さは変わらないものの、長期安定雇用の対象となる者を限定する考え方も高まっている（厚生労働省 2009）。

このような環境条件変化の中で、労働市場における中堅である成人層が、自立した個人としてキャリアを形成するための支援対象者として、注目されるようになってきた。

例えば、生涯キャリア形成支援と企業のあり方に関する研究会報告書（2007）では、職業生涯において転機となる節目を乗り越えることの重要性と、学校から就労に至る時期（若年期）、中年期、定年退職前後の時期（高齢期）という３つのキャリアの節目の問題点が指摘された。これは、生涯キャリアを初期キャリア（労働市場参入）→中期キャリア（労働市場における中堅）→後期キャリア（定年退職前後）と分けた場合の、各キャリア期における課題の指摘ととらえることができる。

中期キャリアは、客観的キャリアと主観的キャリアのせめぎあいによるキャリア葛藤から、家庭責任も考慮に入れつつ、後期キャリアの展開に向けて、キャリアを客観・主観の両側面から再構成していく時期に当たる。個人が生涯を通じて能力を発揮して生き生きと働き、キャリア形成を進めることができる経済社会を構築するためには、各層に対応した必要かつ適切な支援が必要である。中期キャリアを生きている労働市場における中堅である成人層も例外ではない。むしろ、客観的・主観的キャリア両面からの葛藤を内在しつつ、それを乗り越えて、生涯キャリアを見通してキャリアの再構築を必要とするという点において、キャリア形成支援に関する議論の対象として注目されるべき層ととらえることができる。

以上の問題意識に基づき、本報告書では、50 代の調査回答者に学校卒業から現在までのキャリア(20 代から 50 代に至るキャリア)を想起してもらう調査を行い、個々の調査回答者の客観的なキャリアと①現在の満足感、②ライフイベント、③質的データ（ライフライン法、自由記述等）との関連についての詳細な分析を行い、成人キャリア発達および今後の成人キャリア支援施策・キャリア・コンサルティング技法等に関する示唆を行った。

## 2. 研究方法

### (1)調査対象者

本研究では、50 代（2009 年 1 月において 50～59 歳＝1949 年２月生～1959 年 1 月生）の常勤労働者を対象として、生涯キャリア形成支援ニーズに関するアンケート調査を行った。50 代の常勤労働者を対象とすることにより、経済社会の中堅的な担い手としての 30 代～50 代の成人層におけるキャリア形成の問題点およびニーズを把握することができると考えた。

**(2)調査手法**

調査は、2009 年 1 月に実施した。調査対象者の選定にあたっては、調査会社を通じて、調査会社のモニターに郵送にて調査票を配布し、返送するように依頼した。50 代常勤職 2,000 名（男性 1,500 名、女性 500 名）。国勢調査および就業構造基本調査等に示される 50 代の常勤職の実際の男女比・職業比に近づくようにサンプリングを行った。

**(3)調査内容:**

調査項目は、大きく、「本人について」「自分の子どもの将来について」「学校におけるキャリア教育について」「社会人の立場からみたキャリア教育について」「地域住民の立場からみたキャリア教育について」「今後の社会情勢について」の 6 つのセクションに分かれていた。それぞれのセクションに含まれていた質問内容を以下に示す。

・基本属性（性別、居住地、年齢、雇用形態、労働時間、年収、最終学歴、配偶者・子供の有無、介護家族の有無）

・これまでのキャリア（勤続年数、入社の経緯、現在の勤務先の業種・職業・従業員数、転職経験の有無、失業の有無、職業経験、職業能力の自己評価、年代別「仕事」「家庭」に関する重大だった出来事

・現在のキャリア（現在の生活の満足度、これまでの職業生活やキャリアに対する満足度、転職希望、学習意欲）

・今後のキャリア（今後の職業生活に対する見通し、職業生活を引退後の見通し、何歳まで働き続けたいか、老後に対する不安、今後を考える上で行政に求めるサポート

・質的調査項目（過去の危機に関する自由記述、文章完成法、ライフライン法）

**3. 研究の結果**

**(1)「第1章　問題　1. 本研究の背景－経済社会の環境変化と生涯キャリア」の主な内容**

各世代のキャリアの背景には、その世代が経験してきた時代背景がある。第 1 章では、以下の分析の前提として、調査対象者となる 50 代の者のキャリア形成の時代背景と現在の就業状況を概括した。

本章における検討の結果、本調査の対象者である 50 代（2009 年 1 月において 50～59 歳＝1949 年 2 月生～1959 年 1 月生）のキャリアを考えるにあたっては、下記の環境条件を念頭に置くことが必要である（図表 1）。

①多くの者が高等学校等に進学し、大学・短大に進学する者はまだ少数派であったこと、

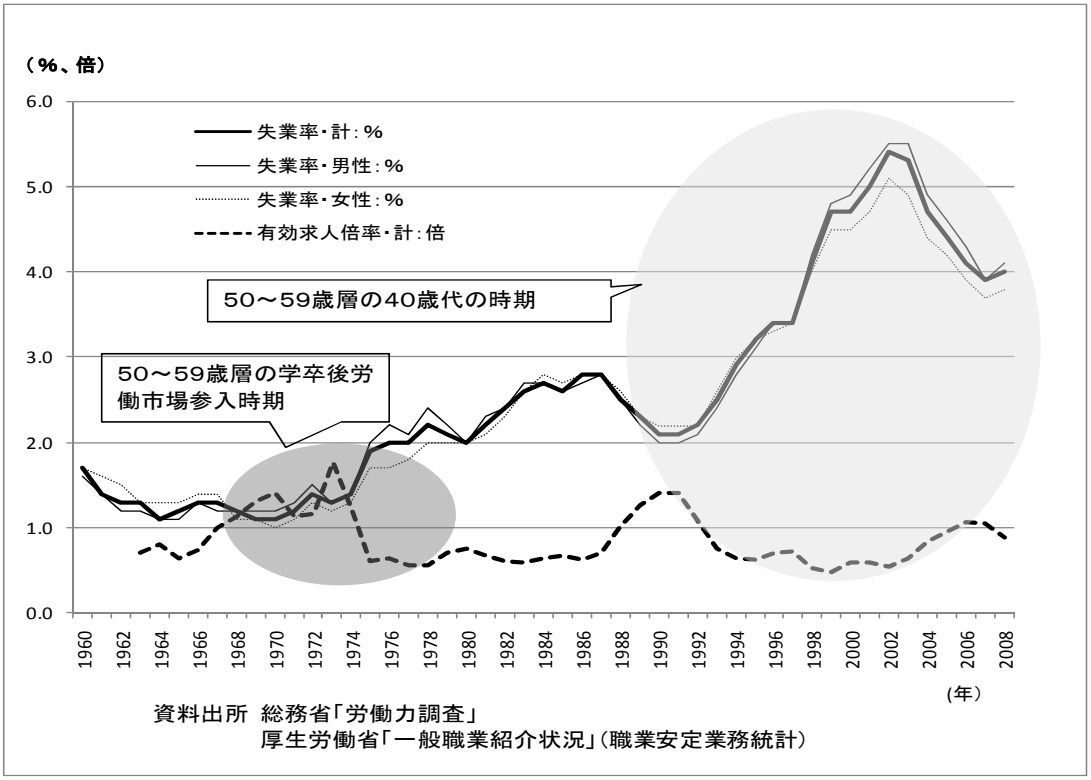
②初婚年齢は、男性 30 歳前後、女性 25 歳前後と現在より早いとともに初婚の時期が集中していたこと、

③学卒後の労働市場参入時期が第 1 次オイルショック後の雇用・失業情勢悪化期に当たった者が多かったこと、

④20 代後半から 30 代後半時に好況を経験していたこと、

⑤30 代前半～40 代前半時以降、経済環境の激変の中で雇用・失業情勢が急激に悪化したこと、

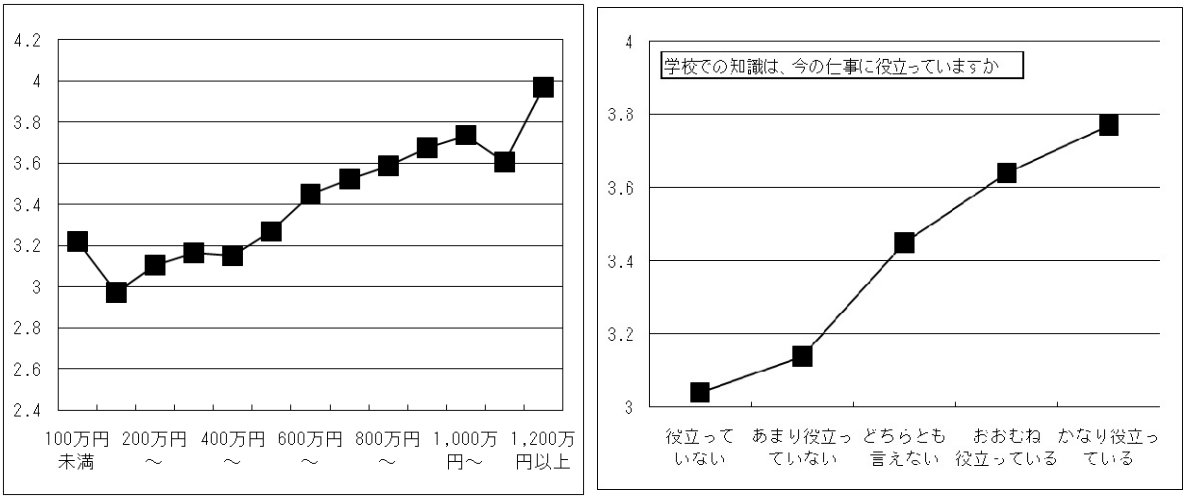
⑥中期キャリアにおいて、経済社会の変革を経験し続けたこと




**図表1 失業率及び有効求人倍率の推移**

**(2)「第2章 50 代の就業者の現在の満足感」の主な結果**

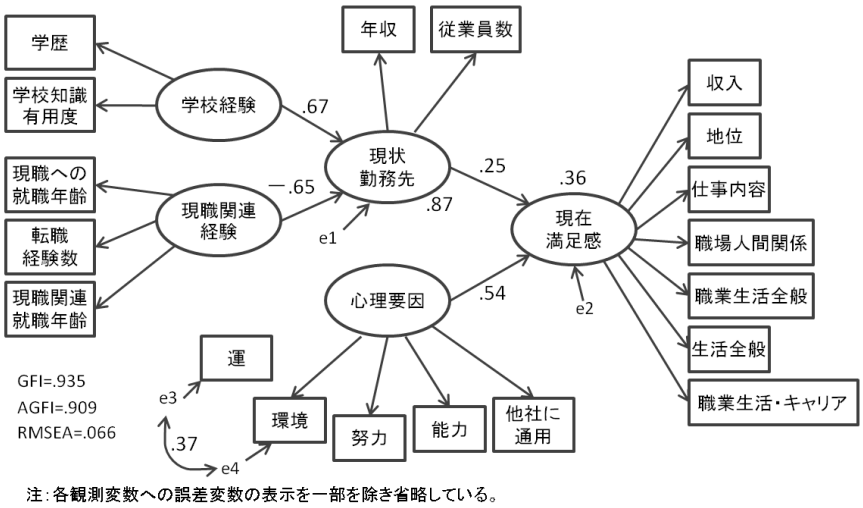
50 代の就業者の現在の満足感について検討を行った結果、概して、①収入が高い人の方が、②勤務先の企業規模が大きい人の方が、③他の学歴に比べて大学・大学院卒業者の方が、④学校での知識が役立っていると思う人の方が職業生活・キャリアに対する満足感も高いといった傾向などがみられた（図表２）。




**図表2 満足感と年収（左）、学校での知識との関連（右）との関連**

50 代就業者の現在の満足感を規定する要因の因果モデルを検討した結果、図表３に示したとおり、現在の満足感に影響を与える要因は、①年収や従業員数などの現状の勤務先の

状況、②人生は努力によって決まると考える心的態度の２つの要因に大別され、それぞれ現在の勤務先の状況に学校時代の経験が影響を与えるというモデルが構成された。




注：各観測変数への誤差変数の表示を一部を除き省略している。

**図表3　50 代就業者の「現在の満足感」を規定する諸要因**

**(3)「第3章　50 代就業者のライフイベントと成人キャリア発達との関連の検討」の主な結果**

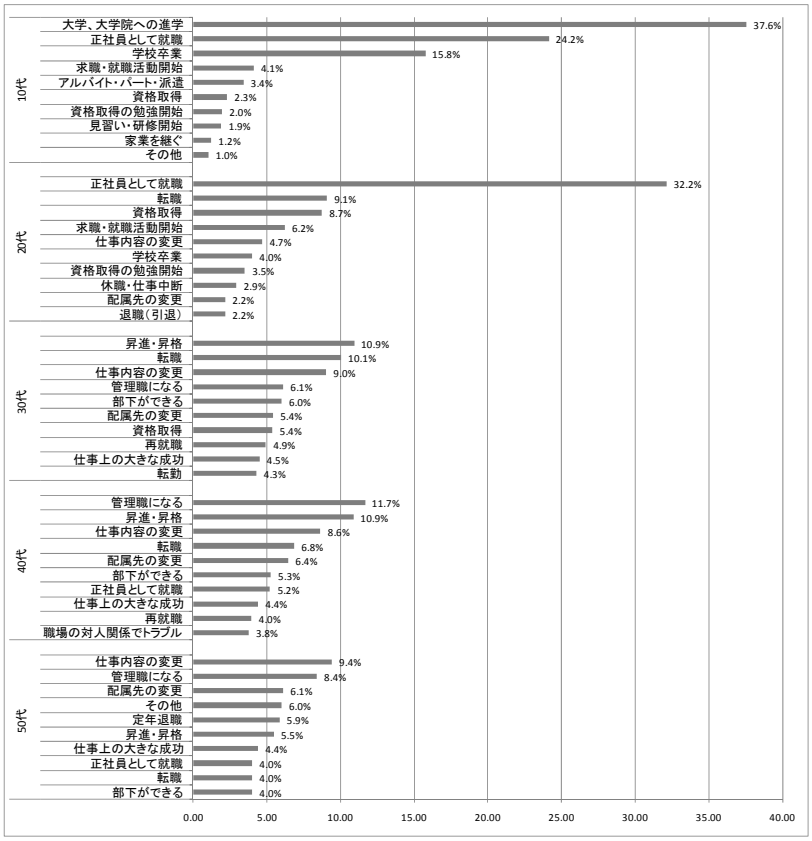
第３章では、50 代就業者のライフイベントと成人キャリア発達の関連について検討を行った。

図表４には、仕事上のライフイベント項目として用意された項目について、10 代から50代の各年代で一番重要だった出来事として選択された項目を示した。10代では「大学、大学院への進学」「正社員として就職」「学校卒業」、20 代では「正社員として就職」」、30 代では「昇進・昇格」「転職」「仕事内容の変更」、40 代では「管理職になる」「昇進・昇格」「仕事内容の変更」、50 代では、「仕事内容の変更」「管理職になる」「配属先の変更」という結果となった。

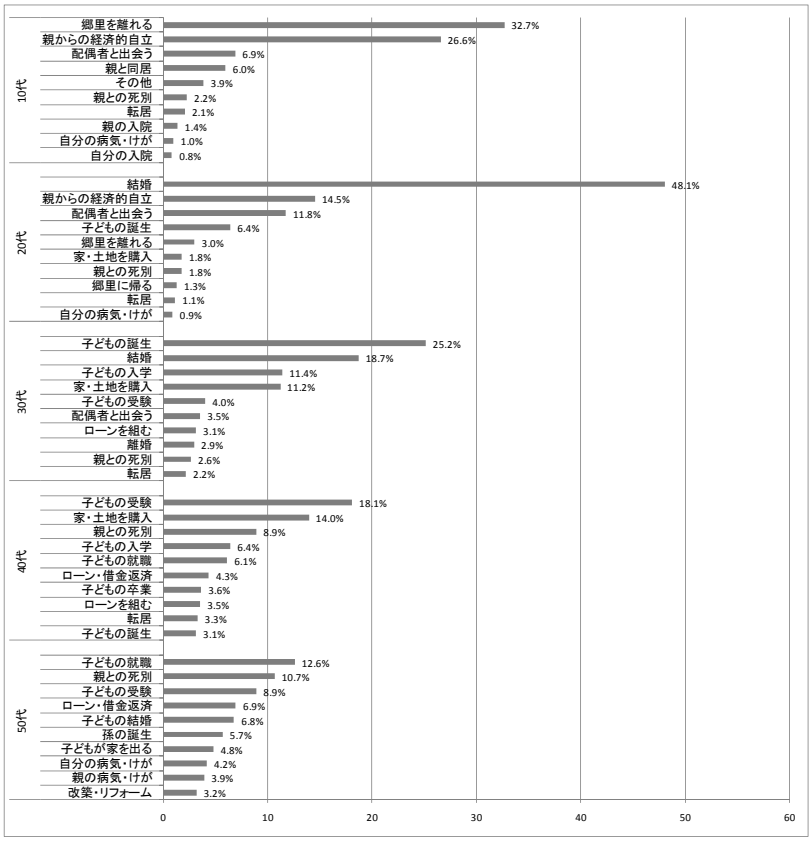
図表５には、同様に、家庭でのライフイベント項目として用意された項目を示した。10 代では「郷里を離れる」「親からの経済的自立」、20 代では「結婚」、30 代では「子どもの誕生」と「結婚」、40 代では「子どもの受験」「家・土地を購入」、50 代では「子どもの就職」「親との死別」という結果となった。

全般的に、「仕事」上のライフイベント、「家庭」上のライフイベントともに、10 代では、10 代、20 代は一つか二つの項目の選択率が高くなり、共通に選択される項目が決まっている。それに対して、30 代以降は選択される項目が分散するため、各項目の選択率は相対的に低くなる傾向が認められた。ただし、仕事に関するキャリア・パターンの方が家庭のパターンよりも、若干、分散していた。特に男性においてその違いが大きく、10 代で選択された項目以降、キャリア・パターンが回答者によって、大きく変わることが影響を与えるようであった。

また、概して、仕事に関しては 10 代、20 代では男女差がないのに対して、その後の年代で、キャリア・パターンが大きく異なっていることも示された。家庭生活に関しては、仕事に関する違いほど男女差は見られなかった。



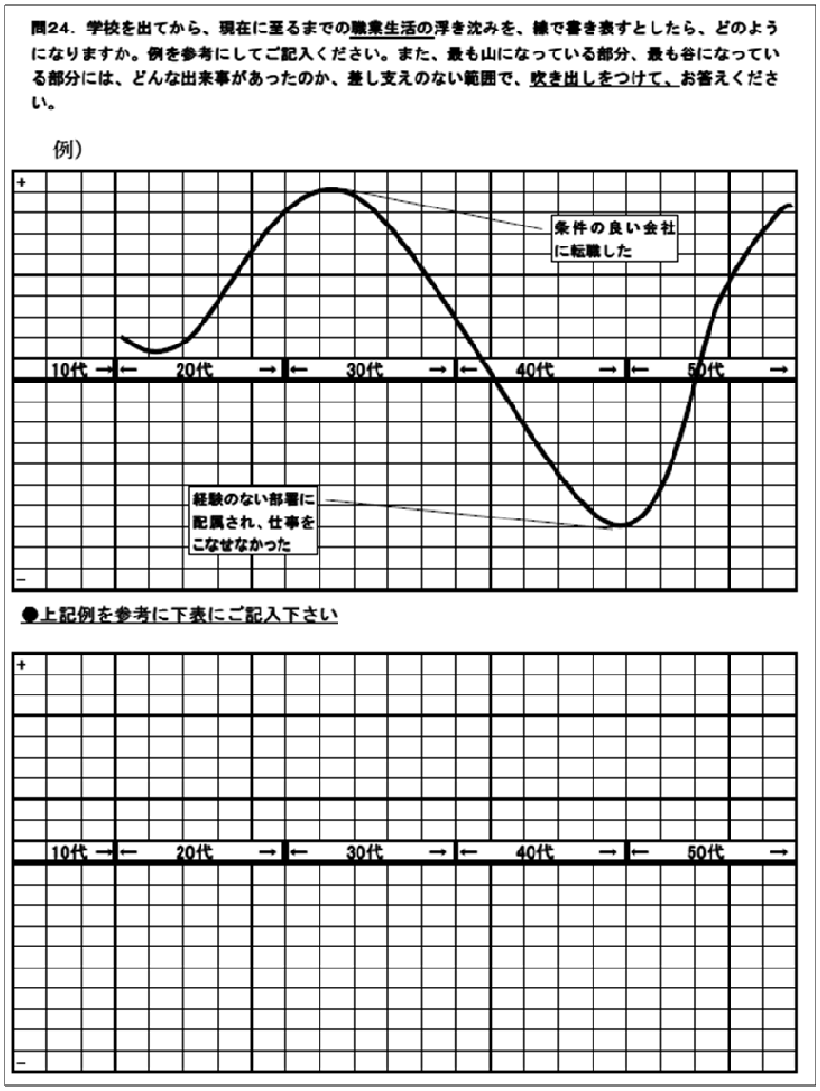

**図表4　仕事に関する出来事の各年代別上位 10 項目の選択率（%）**




**図表5　家庭に関する出来事の各年代別上位 10 項目の選択率（%）**

**（4）「第4章　50 代就業者のキャリアの描像①ーライフライン法による成人キャリア発達の検討」の主な結果**

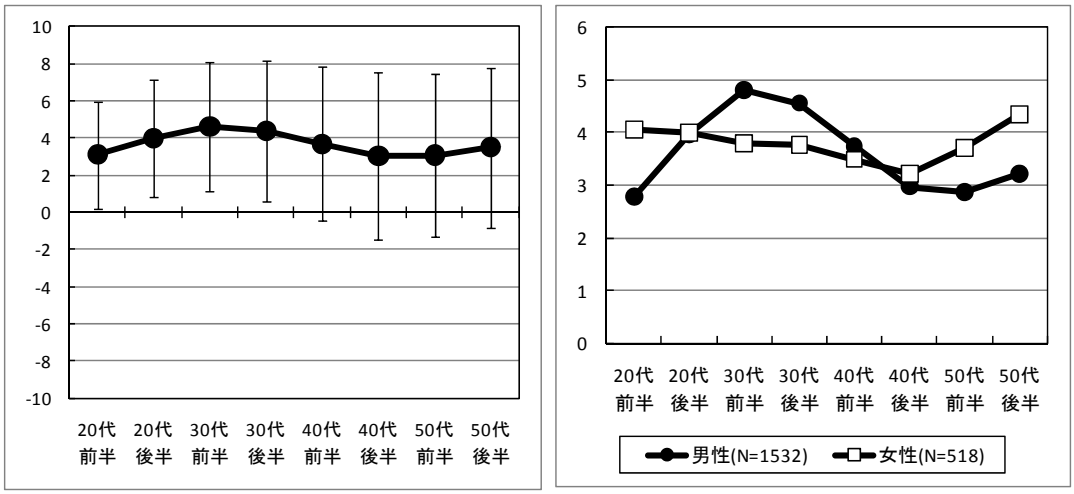
本研究では、図表６に示したような教示文および例示を提示して、学校卒業後から現在に至るまでの職業生活の浮き沈みを曲線で描くように、調査回答者に求めた。




**図表6　ライフライン法の手続きと具体的な教示文**

図表７左は、全調査回答者が描いた曲線を数値化したデータの平均値を年代ごとに求めたものである。図表７左に示されるとおり、おおむね曲線は０以上の範囲に描かれることが多かった。また、ライフラインの形状は、20 代から 30 代前半にかけて上昇し、30 代前半をピークに 40 代後半にかけて下降し、その後 50 代前半から後半に向けて再度上昇していた。人が自らの職業生活を振り返って曲線で描いた場合、30 代前半でピークを迎え、その後下降して 40 代後半で底を打ち、その後再び上昇するＳ字曲線を描く傾向が示された。

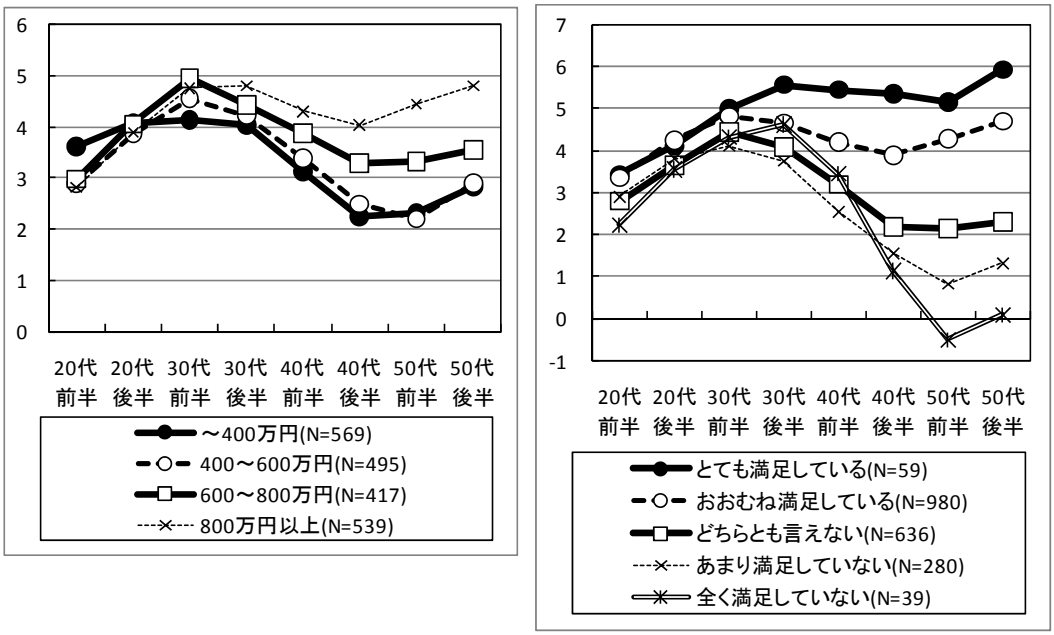
なお、性別に検討を行った結果、図表９右に示したとおり、男性では上述した 30 代前半をピーク、40 代後半を底としたＳ字型の曲線がより明確に示されていたのに対して、女性では線の形状はより平板であった。男性と女性では、自らのキャリアを想起して描いたライフラインの形状が異なるという結果が見られた。




**図表7　ライフラインの全体の傾向（左）と性別の形状の違い（右）**

ライフラインの形状は、現在の勤務先の業種・職種の他、様々な要因との関連がみられたが、なかでも、最も大きな違いがみられた要因は、「最近１年間の年収」と「これまでのキャリアに対する満足感」であった。

図表８左には、最近１年間の税込み年収別のライフラインの形状の違いを示した。20 代前半では「400 万円未満」の者の値が他より高く、年代があがるにつれて「800 万円以上」＞「600～800 万円」＞「400～600 万円」「～400 万円」の差が開くようであった。また、図表８右には、「これまでのキャリアに対する満足感」別のライフラインの形状の違いを示した。「とても満足している」と回答した者は 30 代後半から他よりも値が高く、年代が高くなるにつれて「おおむね満足している」＞「どちらとも言えない」＞「あまり満足していない」＞「全く満足していない」の値の差が大きくなり、50 代では明確な開きがみられた。



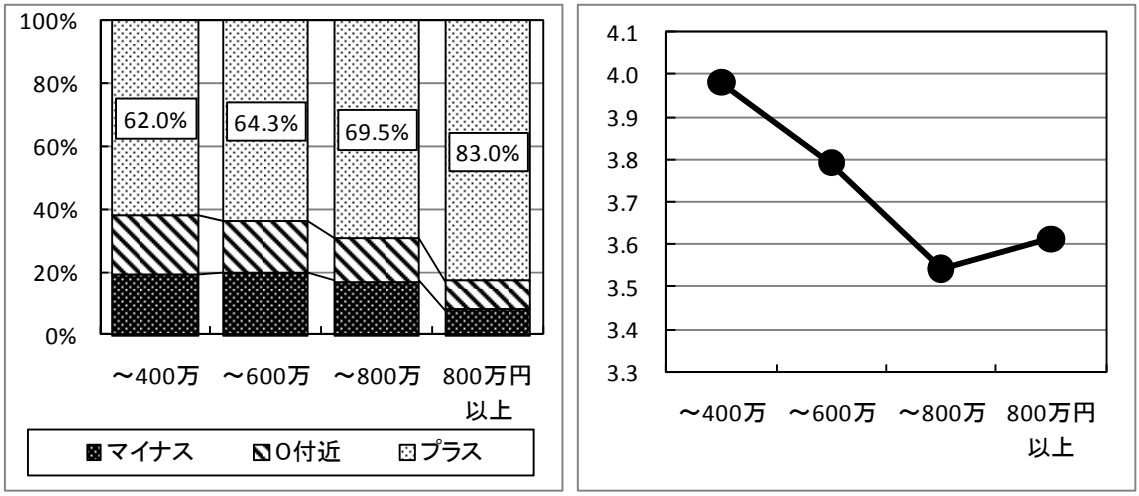

**図表８「最近１年間の年収（税込み）」別（左）および**
**「これまでの職業生活やキャリアに対する満足感」別（右）のライフラインの形状の違い**

**(5)「第5章　50 代就業者のキャリアの描像②ーライフライン法のキャリア形成支援ツールに向けた検討」の主な結果**

ライフラインの全般的の形状以外にも、「全般的な線の位置」「最終的な線の位置」「曲線の波形」「屈曲点の数」「最高点・最低点の年齢および評定値」などの様々な指標を作成して、検討を行った。

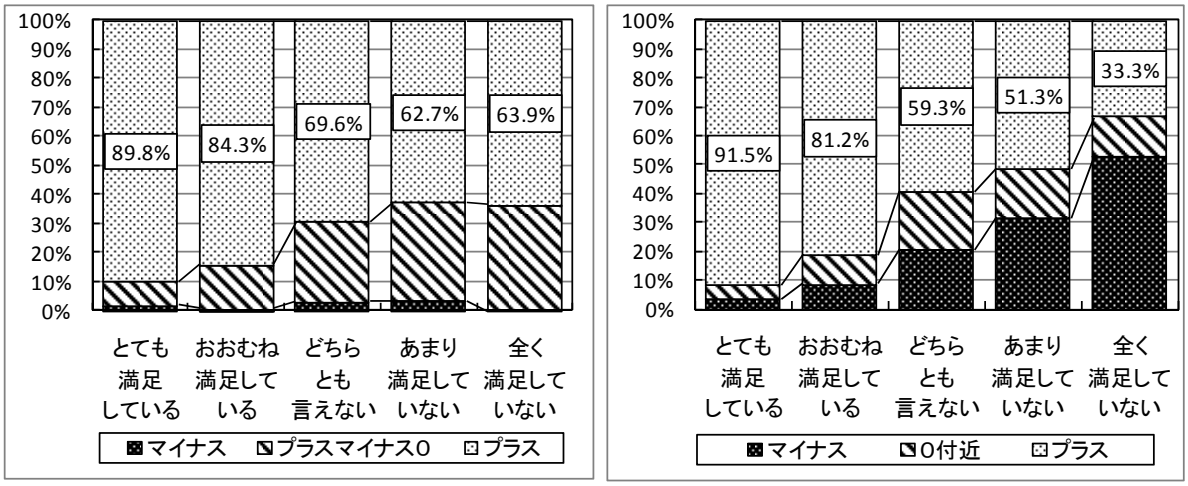
その結果、やはり「最近１年間の年収」と「これまでのキャリアに対する満足感」で顕著な結果が示された。

図表９左に示したとおり、年収が高いほど「全般的な線の位置」はプラス、「最終的な線の位置」もプラスである者が多かった。また、図表９右の「屈曲点の数」のグラフに示されるとおり、総じて言えば、年収が低いほど屈曲点が多い、複雑な曲線を描くようであった。




**図表9　最近1年間の年収（税込み）別の「最終的な線の位置」（左）と屈曲点の数**

図表１０に示したとおり、「全般的な線の位置」「最終的な線の位置」ともに、満足感が高いほど「プラス」の者が多く、満足感が低いほど「マイナス」の者が多かった。




**図表10　これまでのキャリアに対する満足感別にみた**
**「全般的な線の位置」（左）および「最終的な線の位置」（右）**

### (6)「第6章　50 代就業者のキャリアの意味づけ－自由記述データを用いた検討」の主な結果

第６章では、自由記述データを用いて 50 代就業者のキャリアの意味づけとして、「過去の自分の職業生活で最も危機だったと感じること」および「これまでの職業生活に対する感じ方・考え方」に関する自由記述を分析した[1]。

図表１１には、「過去の自分の職業生活で最も危機だったと感じること」は「どのような出来事ですか」に関する自由記述で用いられる頻度の高かった語句を示した。最も用いられやすい語句は「仕事」であり、以下「会社」「関係」「倒産」「転職」と続いていた。

過去の職業生活上の危機に関する自由記述で使用される頻度の高かった語句をいくつかの主だった要因別に検討した。

図表１２には、性別、危機を経験した年代、昨年の年収別の結果を示した。以下の３点が示された。①男性は「会社」「転職」「リストラ」の語句を使用する割合が高く、女性は「関係」「人間」「就職」の語句を使用する割合が高かった。②過去の職業生活上の危機は 20 代にあったと回答した者は「転職」の語句を使用する割合が高く 40 代と 50 代では「リストラ」、50 代では「入院」を使用する割合が高かった。③昨年の年収が 400 万円以下と回答した者は「倒産」「リストラ」「就職」、400～600 万円と回答した者は「会社」「退職」、600～800 万円と回答した者は「職場」、800 万円以上と回答した者は「上司」「内容」を使用する割合が高かった。

概して、年収が高いほど職場内での危機、年収が低いほど雇用そのものをめぐる危機が記述されやすいと解釈される。

**図表11　過去の職業生活上の危機に関する自由記述で使用頻度の高かった語句**

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 仕事 | 260 | 子供 | 21 | 社員 | 14 |
| 会社 | 253 | 体調 | 21 | 移動 | 14 |
| 関係 | 100 | 給料 | 20 | 出産 | 14 |
| 倒産 | 87 | 失敗 | 20 | 赴任 | 14 |
| 転職 | 86 | 出向 | 20 | 精神 | 13 |
| 人間 | 79 | 変更 | 20 | 責任 | 13 |
| 上司 | 78 | 希望 | 19 | 管理 | 13 |
| 病気 | 51 | 社長 | 18 | 経験 | 13 |
| 退職 | 61 | 危機 | 17 | 子育て | 13 |
| 自分 | 52 | 収入 | 17 | 大変 | 13 |
| リストラ | 51 | 対人 | 17 | 不安 | 13 |
| 職場 | 50 | 単身 | 17 | 不景気 | 13 |
| 就職 | 41 | 悪化 | 17 | 不振 | 13 |
| 転勤 | 38 | 合併 | 17 | バブル | 12 |
| トラブル | 35 | 残業 | 17 | 技術 | 11 |
| 内容 | 33 | パート | 16 | 職種 | 11 |
| 入院 | 33 | 業績 | 16 | 不良 | 11 |
| 部署 | 30 | 業務 | 16 | ストレス | 10 |
| 営業 | 30 | 事業 | 16 | パソコン | 10 |
| 勤務 | 29 | 部門 | 16 | 正社員 | 10 |
| 経営 | 27 | 失業 | 16 | 借金 | 10 |
| 事故 | 26 | 家業 | 15 | 生活 | 10 |
| 不況 | 25 | 部下 | 15 | 廃業 | 10 |
| 配属 | 23 | 両立 | 15 | 配置 | 10 |
| 異動 | 22 | 交通 | 14 | 離婚 | 10 |

[1]　自由記述データの分析には、樋口耕一氏によって開発・公開されているフリーソフトウェアである「KH Coder」（http://khc.sourceforge.net/index.html）を用いた。

**図表12　過去の職業生活上の危機に関する自由記述で**
**使用頻度の高かった語句の性別、危機を経験した年代別、昨年の年収別の検討**

| 性別 | 男性 N=1532 | 女性 N=518 |
|---|---|---|
| 「会社」 | **14.2%** | 6.2% |
| 「関係」 | 4.1% | **7.1%** |
| 「転職」 | **5.0%** | 1.9% |
| 「人間」 | 3.1% | **6.0%** |
| 「リストラ」 | **2.9%** | 1.4% |
| 「就職」 | 1.2% | **4.1%** |

| 危機を経験した年代 | 10代 N=30 | 20代 N=291 | 30代 N=339 | 40代 N=583 | 50代 N=247 |
|---|---|---|---|---|---|
| 「転職」 | 0.0% | **9.3%** | 5.9% | 5.7% | 1.6% |
| 「リストラ」 | 0.0% | 0.3% | 1.8% | **5.0%** | **6.1%** |
| 「入院」 | 3.3% | 2.7% | 0.9% | 1.5% | **4.5%** |

| 昨年の年収 | ～400万円 N=569 | ～600万円 N=495 | ～800万円 N=417 | 800万円以上 N=539 |
|---|---|---|---|---|
| 「会社」 | 13.0% | **15.6%** | 10.8% | 9.5% |
| 「倒産」 | **6.7%** | 5.1% | 2.9% | 2.0% |
| 「上司」 | 1.9% | 2.8% | 4.3% | **6.3%** |
| 「退職」 | 3.7% | **4.8%** | 1.2% | 1.9% |
| 「リストラ」 | **3.9%** | 3.4% | 1.7% | 0.9% |
| 「職場」 | 0.7% | 2.0% | **4.1%** | 3.5% |
| 「就職」 | **3.9%** | 1.4% | 1.2% | 1.1% |
| 「転勤」 | 0.7% | 1.2% | 2.9% | 2.6% |
| 「内容」 | 0.7% | 0.6% | 2.4% | **2.6%** |

※残差分析の結果、5%水準で有意に値が大きい箇所に網かけ、
小さい箇所に下線を付した。

図表１３には、「これまでの職業生活で後悔することは」「これまでの職業生活で最も良かったと思うことは」「これまでの職業生活で最も役に立った能力は」に関する自由記述で出現頻度の高い語句を示した。

**図表13　これまでの職業生活に対する感じ方・考え方に関する自由記述で出現頻度の高い語句**

| 後悔することは | | 最も良かったと思うことは | | 最も役に立った能力は | |
|---|---|---|---|---|---|
| 資格 | 118 | 仕事 | 258 | **能力** | **160** |
| 仕事 | 108 | 自分 | 129 | 資格 | 147 |
| 勉強 | 80 | 会社 | 117 | **知識** | **88** |
| 会社 | 77 | 関係 | 84 | 関係 | 78 |
| 自分 | 68 | 人間 | 77 | 技術 | 76 |
| 転職 | 60 | 経験 | 63 | **パソコン** | **67** |
| 就職 | 47 | 資格 | 57 | 仕事 | 58 |
| 職業 | 42 | 就職 | 49 | **免許** | **51** |
| **後悔** | **42** | 職場 | 46 | **コミュニケーション** | **50** |
| 取得 | 41 | **友人** | **46** | 取得 | 45 |
| **退職** | **31** | 転職 | 46 | 人間 | 42 |
| **大学** | **29** | **海外** | **39** | 経験 | 42 |
| **最初** | **28** | **上司** | **38** | 専門 | 39 |
| 関係 | 27 | **仲間** | **38** | 自分 | 34 |
| 人間 | 26 | **生活** | **35** | **性格** | **33** |
| **不足** | **26** | 職業 | 32 | **対人** | **32** |
| **結婚** | **23** | 技術 | 31 | 営業 | 28 |
| 子供 | 21 | **部下** | **31** | **忍耐** | **27** |
| 経験 | 21 | 営業 | 28 | **運転** | **25** |
| **学生** | **20** | **収入** | **24** | **英語** | **21** |
| 技術 | 20 | **成功** | **23** | 管理 | 21 |
| 職場 | 20 | 勉強 | 23 | 勉強 | 21 |
| 専門 | 20 | 子供 | 21 | **経理** | **20** |
| | | **管理** | **21** | | |
| | | **企業** | **20** | | |
| | | 取得 | 20 | | |

最も出現頻度が高かった語句は、①「後悔することは」に関する自由記述では「資格」であり、以下「仕事」「勉強」「会社」「自分」と続いていた。②「最も良かったと思うことは」に関する自由記述では「仕事」であり、以下「自分」「会社」「関係」「人間」と続いていた。③「最も役に立った能力は」に関する自由記述では「能力」であり、以下「資格」「知識」「関係」「技術」と続いていた。

なお、図表１３で太字下線の語句は、「後悔することは」「最も良かったと思うことは」「最も役に立った能力は」に関する自由記述のいずれかで出現し、他の２つでは出現しない語句であった。「後悔することは」では「後悔」「退職」「大学」「最初」「不足」、「最も良かったと思うことは」では「友人」「海外」「上司」「仲間」「生活」、「最も役に立った能力は」では「能力」「知識」「パソコン」「免許」「コミュニケーション」などが挙がっていた。

**(7)「第7章　成人キャリア発達支援に向けて」の主な結果**

本章では、本報告書の各章の分析結果から、成人のキャリア発達支援に向けて注目される事項を要約し、その上で成人に対するキャリア発達支援施策等について若干の示唆を行った。その上で、今後の生涯キャリア形成支援に向けて必要となる行政からのサポートについて検討を行った。

各年代について、30 代の長期キャリアを見通した支援として、それまで積み上げてきたキャリアに満足するだけでなく、30 代の段階から今後のキャリアを見通した長期的な職業生活設計を立て、その中で具体的な目標を設定して能力開発を進めることが重要であることを指摘した。また、40 代のキャリアの落ち込みを作らない（最小限にする）ための支援として、キャリアの落ち込みを最小限にするような支援策の必要性、企業内における従業員個人のキャリア形成に関する相談、労働移動をスムーズに行うことができるような支援の重要性などを指摘した。さらに、50 代の将来キャリアの見通しに対する支援について、労働市場や職業等の情報提供、転職や独立のための相談・斡旋体制の充実、職業生活の相談・アドバイス機能の重要性を指摘した。

その他の事項として、「キャリアに関する相談機能の充実と良質なキャリア・コンサルティングの提供」および「成人のキャリア形成支援ツールとしてのライフライン法」について述べた。

**本報告書の構成（目次）**

第１章　問題
第２章　50 代就業者の現在の満足感
第３章　50 代就業者のライフイベントと成人キャリア発達との関連の検討
第４章　50 代就業者のキャリアの描像①　－ライフライン法による成人キャリア発達の検討
第５章　50 代就業者のキャリアの描像②　－ライフライン法のキャリア形成支援ツールに向けた検討
第６章　50 代就業者のキャリアの意味づけ－自由記述データを用いた検討
第７章　成人キャリア発達支援に向けて
資料

労働政策研究報告書　№114　サマリー
成人キャリア発達に関する調査研究
－50 代就業者が振り返るキャリア形成－
発行年月日　　２０１０年３月５日
編集・発行　　独立行政法人　労働政策研究・研修機構
〒177-8502　東京都練馬区上石神井 4-8-23
（照会先）　研究調整部研究調整課　TEL:03-5991-5104
（販売）　研究調整部成果普及課　TEL:03-5903-6263
FAX:03-5903-6115
印刷・製本　　株式会社 上野高速印刷

©2010 JILPT

＊労働政策研究報告書全文はホームページで提供しております。（URL:http://www.jil.go.jp/）